夏引集

水上亭桃鏡

上、下、合冊

宝暦十一年

序

卯雪・カ・素国・子・年

号・女・北市・之・浪速・子・婦・梅・百・青春

琴曲集 巻上（原書）
琴曲集 巻下（写本）

水戸藩

序

こゝにすゝ風し實ゝ芭蕉翁の
翁にゆかりある東都の水上亭
桃隣子ハかの叟乃細くかそけき
跡をしたひたまへ世務は海
あるおりくハ俳林に分入て
新古の花實を拾ひ之句乃
わて累五十餘篇を書き記
見えぬのは世にもめ聞古き今朝と

添将月雪花折にふれたる
言種を名の句くを追加
しくく桜ちりぬめ冊とを
目て草ノ集と古實も言葉ゝ
のあやかしきと百子葉ゝ織
なすせるも此之句は一轉也なと
桃子の流を汲し　後進
序とは只一部の趣意を述て

第子をさそひて重ねて洛下を求む

大夏居士

寛暦十一辛巳春三月

之句ひとり祭の説　水上亭　桃鏡述

貞徳老人寂安乃連歌式を仲筆し

和歌をもつぱらして連俳二門を分て

雅俗乃宗因檀林の新風を發せり

いへとも湖合を連歌と呉る説

貞徳風

撫遊首とや、さるからん
傘乃かつ月ましめる息女よ
宗因風
夕月の来い戯て月を望
おもしろ也此世乃西風の責か
かく花云を喚ひて二句此間に余念を
然るに更にあかりの後に芭蕉
の翁杜律乃風骨を探り山家集此

寂をたよりて正風蕉門の此りとよ
枯枝に烏のとまりけり秋の暮
繊ゝるもり旁乃遠　里
くる幽玄の附方り人情此理屈を離く
と云へるも世に此いまて古風の移えりよ
綿までは此を附よつる傳れなる此
席上の常談まで俳諧ならぬ一句く
發句案するせり附を離して其のつ

○ゆばり
去来花実集に猿蓑集か
「りうごや沖の時雨よ」
の岳帆斤帆に出る仕損し侍る
只有明や斤帆よう
けて一時雨らト云はず
いそがしや岳帆
り帆も其中にも
りて句の主りよく心
○ねばり少かな
・・・

二句花月を蓮華の切字に重ね
引き解きたるやさしとて さい
形容并敬の餘乃ちの人を遣き
こそこそれと志めし意を人に近き
とすとのうるとく明師の氏代
を時を三五へて三ツ花と書
嵐雪をそしめ蕉門の古老や死
らせ此乃の義 調て正徳享保代

都鄙一句の作意をして
脊板をもたるし女乃 梅
乳母を出し絵扇を出て流川の
叶は徒は別の俳徒 九種一體 ちりあれ流て
今やたのく謝合を元の寂聲なる人
祝ちうやくれ古風を高して世代
を点乃句作をえれて
立世を支槌をう流生をう

女衒の女房えせ物を義心
清士ハ志づんて志らぬ雷
七拍をかつて影をくらす
目を出すく客人て者
[illegible]の[illegible]
[illegible]の所をて支柱をうなれ
[illegible]自分自身[illegible]

元禄五年
富松原

[illegible]
[illegible]南出[illegible]葛屋の梅の長情て不ト
新しく春を[illegible]
[illegible]の廣[illegible]
又
[illegible]
宿[illegible]
晉子の[illegible]

俗の百貫無用なる時就と奏を
寄屋乃使を〻〻なる用雨れかる
へ〻次只かし〻ハもちとい〻事を七字
〻〻西よと義れ中〻を〻〻〻西れ
根風や沉吟のさ海又〻れたかと
〻〻〻を例乃晋子かく〻〻西と俗
作〻〻指の廣葉のくゞり〻〻〻
〻れと義を〻〻あと社中感し

後句の為

〻〻〻〻後の句乃附句を警師も
指南者〻〻と次附句〻〻人を遣
〻〻同意新〻〻三句のうち〻意も
〻ふつ〻〻〻れ〻〻〻〻一句の
他〻〻も新附句の用ある事を
三〻〻今り自問自答れ理ハ
附句の事情を表〻て一意〻れ〻の
当勝〻〻〻〻只器〻〻〻句他と

[illegible]居士の記拾物の事をむし菴
の為仏頂禅師乃舎下に系して
投子一碗の茶く俳諧乃三句目を
時て縛随放逸乃世道に自立成
[illegible]句と一句に一句
附加せるとを掛くいとへうる
歌仙と三十六句の巻篇百員と百員
序破急也さ皆三句乃[illegible]

千化義変乃[illegible]
の席上に[illegible]
[illegible]
[illegible]句解[illegible]
[illegible]
師説の作[illegible]遠近
同門と志を同[illegible]
對[illegible]潜行密用とい[illegible]

●二條殿基公知道抄 宝徳三年 附合之儀
三義五解の三義
一、天地開闢
二、句義合
三、風情詞と考へ

一 義合 おのゝ對して新古を定めし事
一 句体 おのゝ對して彩古虚実のり
一 てをは おのゝ對して志ゝりの事

附合の鏡 知道
（宝永元、五月十九日）

一 物 同巳道 おのゝの人情を帯する附の一物
一 隨 おのゝの附句よりあるべし
一 放 おのゝの隨物をうけて放ちの如し
おのゝ對して風色を暗後時
巳附のたゝしきと志べし

一 逆 おのゝの風色を反逆して
志ゝ所一の用と志べし

●二條公知道抄 五解
傍書入の通り

一 秋月の山の端をうつし
舟の音波を流すし
一 舟の音波を流すし
一 隣家を告げんとすること
一 秋の風乃方草を吹あひすること
一 絵に物思ふ女乃人の心を動すこと

乙秘

三句此のゝ案
今ハ昔ゝ紙乃無き浮世之
封して口す小判百両
子狩りしも蔵埋を申と未へ出と
封してあるすといふ者ともすへ渡
金なしとりん家しる附方也
並しし風のたゝぬ学察

堅人を
道楽に導く
古今不変

梅梁と梅梁さけの工夫して
三味線弾の忽然と来る
かの石銘金を去といつる黄金使ひて
御よるゝしる梅梁のた工夫しとより
生情も雛子の紅綿乃名家ともたよし
山のしの里へ康の一部
茶話く居館る状の十石買
世中御乃堀くにこく

○ある由、
那由を経かさねる、
儀清みて清らに着る衣、
今は、とめ油と云ふ、一説
ハツロを云ふ〜すすり

○五性のうち火と水は合はゆと云
ことと

○例勤、例室、妾、侍人して居る例勤の女と見定る

見定る

高貴の十百貫の使ひ遣ひ定る
書は生れたる高貴に依行右
ちなる神に生る
水桶も食べぐら
仏の集れる数の

不いとまひして周れて桃灯

廻板もなりふれ茅屋れ内流る
指ふさ金を神や初ふん
廻板もなりふれ西をこうして指さ
金のん移ひ〜ひ〜ら一向れ指〜
云やとる揚屋、萩のみれ白
角ト取かれ人は
苦労した人、
角ト取られても やはり角病
立はる、近年園満と云ふ所ち完全と云ふ語を、九く治ある ちどに
庶用せるは、田の字の誤
下あるう
箱根の釜
賀るかりてふ寸釜坂
釜り通し

卜養（半井氏）
狂歌の場所

さゆ角猫の角ト呼れる五十顔の坪ると
なる無し
夕暮に赤き雲出揃ふて
惨年のまね乃かしれ升れ
卜書して寛を一首とせし之
尋常此弁あらて惨年の二字あり
三句目乃ことばしきを寛を一とと
物苛で和するる乃つまの さ海も

不遇し
三句の一對

又多に代す
茶碗に冷る惨氣二つ四つ
惨香ハ屏風に冷る神たき
湯泉の芸乃葉ちりく
惑の惨香を温泉に見せしる云見
一軸あり
汁を煮る間りゐて居風呂
十九しつ廿と経年盛あり

讀賣り、珍事ある時に五六枚の小本、又は半切（大美濃判半切なり）
二枚くらいに刺板を、少し節をあらため、唄ふもあり明治初年にはヤンレーぶし（ヨトこぶし節附て讀賣あり）

十九世の終年を心中と名付て讀
賣のあらひとなり雅俗あら
のさまもいろん
ホまてこと一口意地つまり
勤のうちさへおもてうら
降りしくと祈る日和もつ時
つまくとなるまつ人まつ人なる

一枚

勤のおもて書成へ一通句の切紙
寺なり
御所のもしの乃端と
長ろて居れを選て勝も
託宣もよ空色もよ
出原の勝もと託宣乃二字あらハ
年まつ一枚なり
寂寞死ねるも哀れなる

水視び　細水（サイミツ）、少量の水

五十

四十七藩乃忠臣を水視びと称して
高の二字を句点とせしめらる

唐紙に刷て焼失影つら
九曲（キウスウ）六（ロク）雨ら降らる

孤二字は忠臣と異字孤の下

キウスウロクは峯岡の二階を孤城に

記しるさ後のあるをさ人情は義戦
ともあるべし

義戦なるべて不動明王
印は乃所例所ら黒格子
古いる尾の使も殺

印の義は所例所ら異ひもあり古者の
陽生都のとを乃割らる世の通
仮名のまち使は素袍

花ゝ月乃青雲

幽の間乃散るる体哉

紙屋石垣乃風流ゆかしかるべき

三月の一切

あるゝ三句共一物ゝ幽の間ゝ物

いうする人をも繁く為ゝ

馬市の立只変ぬ人乃

ゝ月せて月の屋ゝ

常ハ花ん和ぬ金乃たゝ盆

そゝゝの屋かゝあて月乃ゝ海ゝ

むゝゝゝ口説乃風情く

人格ゝけて仲居ゝ

日も暮ゝ手紙陀の波のら

流石ゝけの紙ゝ指ぬ

指りあの言葉ゝお白粉朱の情を

驚かて一句此世ゝ

猥墓ゝ先〈年乃恵乃海

前々のかくり地獄は[redacted]
[redacted]新何[redacted]作
後世と二意に

[illegible]なる世を暮らしく
[illegible]と云ふる地獄
ある此二字勝負の世やうなるを
海をいひとりて生涯保し
掃部寮も無礼吹聴
俗別[illegible]
教諭の[illegible]
何某上人の帰依或る入院乃[illegible]

のはあとを閉じ[illegible]
[illegible]

[illegible]

と兄亜——[illegible]人の[illegible]
[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

心細き（飯不足と思ふ）

の[illegible]あ[illegible]に富士を春を
四つ[illegible]風に吹おろす海彼方の
子の苗乃吉野をふまへて富嶽に高
撫しおろす
帳[illegible]おぼゆる風の迫く
仮樓の心細さく炊ぐ
春の戸の新緑せる
茶碗乃二段掛に御所[illegible]

詞可五句

そらの乃おのこもそそく獨樂[illegible]海之
年時を春脊小原ともそ[illegible]
仰ぎ見[illegible]乃時の風
呼の例く光の美あ[illegible]
はすれあ[illegible]を春を[illegible]樓
こちの相[illegible]とい[illegible]
[illegible]の時分
別者と一樓博ふ女中奇

八專晴のあやめみるに
美よりも誠の不二九九祿
ゆうち越もそ墻を入うりてはうて
むつうしきを月晴の富士を軒うら
よの鶴乃意心を経過て集て
引き神も右ひうり為
敷うしを為める踊の山うつる
右左より神ひくさ毎踊乃敷九九

おうしー
ゆうく通る梵論九突神
八京乃八お少て友うる
墓石罰せるものは
御ものを乃おうしうる山院うものうる
さう八房左の拾ひ茶筅一
儒えも乾うれ市の夕月歌
破うしうつ為て多も和沙

野部仮城か後彩門
に刑部卯也あるしか
[illegible]
安直廿郎か

木陰より陸奥の角力
取らの頃雪降る時ら事なれ
らしなりし
此望ちなりけり抽ちり
小窓の梅と咲ちる小地蔵
掏ちり新と賢者殺る
新町の新場の卵も新又新ら男
年ちの句を宮て立のあり立後の

一枝

一枝ちり
出船へ使者出て来る
一第ちり又云の蜜ル蜂ル
即走の梅乃かり白ちる
梅雄ち禅院出て海を見て
時長乃走り
ちく
水晶て中ち妻と妻と
別ち使へを左ち得る

三句の選び

[illegible]

白湯茶[illegible]へさしもなき世みちの
あらしの句のもとひ又何ぞあらん

七夕[illegible]日和[illegible]

町屋の窓うら富士を一つ[illegible]
さしてあぬ[illegible]揃て世俗
富士の富士をお時うら演[illegible]
[illegible]

[illegible]ひの影も高砂
行笠へ[illegible]
[illegible]も[illegible]の[illegible]板乃金鬼殿
宗合の胡[illegible]
金鬼殿[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

十論九、あちこちのあやまりを、起情こ

墓うくるもの

起情

陽氣を昭を結ける起情こ

嗅まも寒と人の好く

宮ものもたらも宮まか寄

巫女乃らの恋と新る

世界器しの宮ものこうて巫女

卓附

知の

知ものの保一

先へ重氏の大ふてゆく

十八

同者その加勢こ中者発も

御体こ風て金武ふて

一神

宮の三字をうめて女毛れ宗論と

一神の

一神こ成るのあらひこ

ふり向絵こ宮を引て

墓墓の墓こ出へ墓情宮

惟こんひこの外こ宮ものく

多形巻

墓墓の墓ものの和こへ

十九

相模 大磯と小田原の間か

見出

あらら四畳半の茶屋に腰掛て梅沢の右
マジナ
咒を教授する自ひ合ひて
女の机掛らう掛ひさたひ中の
中一面ひと茶屋
駕を進さしに河原ひ
二つ三つ中を通る繁盛
さすの宮と言て彫物
世中の旅籠屋も此る茶屋も此る彫物
乃月茶屋するへ
高輪のたく養福の田舞
印して絵乃説合
張石なるものと細き蛾
臺寺の清せ物合する時釈乃彫物
しく美建すしまさ海張石の二字乃
いひ彫しあり

川越し歩で

陰間

○鏡 かがみ 今又千 新ぬき

○前髪は小僧つる 但越後では大正初年にも中老人が立ておれり

付け其情、伽羅先手らし

お髪の張さんまん大工らしと見受られ

前髪の額を剃ること二百年来行はれ今世老年の人に往々有之 幼年の内多く見之 盛 武家の小姓 庭夫等に有之 賈人に稀 寛政 工匠、又は高位 (天保年間)

伽羅先手

左ゟ

伽羅先手の髪形の図

前髪の額を剃り他の髪形の図

前髪の額を剃り他の髪形の図

秋のとり扱ふ心せうぶの面白順礼の

かゝうさ者の姿はやはり我と見極る

老のさかんな風情

新しく明て清心要石

仏菊より出る月の家
みてきてきて
せんざん市に人出る（ゼゼと渇らず）
前栽物（センザイモノ）
おらつしの離も近よる
おもしくて惜しくて前車
通婿の引に驚くの問答
乳をかけもとめるあるすしうる所
家のさ海と名付して一物に情深し

とのつくり月に涅槃の薬雲
かるうは博奕を作る者
何とぞも男まうに彩ひも
接門の雲のうしをうの女の子海
ゆ化せうる
ひろくく雨の上りあるる
唄もあめ吉田に中の穂おれ
離別つ屋しつあたりけ者

心の駒

有王俊寛の却説

松の木に桜咲つまる角力哉
まつちゝ舞を舞ひ乃公
あ〻まつる坂のことは姫の手紙所を
お匂をうこうこうこうこう
黄塵の生るこのせる雲
命さへあまるかあるまめ合
稚く義元の乃方力自
命さへ所まるその云業を云用りて鬼

界隈の俳一軸
さゆくく世代後衣を
賀一挺ゝ兎かゝりを
以書ゝさへ用も言葉を
尚ゝ月の宝を乃ゝ
ゝをひなるを一挺のかゝ兎かゝら
お合ゝ白紙ゝ
ゝゝゝ

宋橋紙あゝて旭と紙
あゝむ五ゝ十念の
紙於て乃至ゝ乃至ゝ
然谷の師をと教んの俳教へ
世を名和れ後家の世後り
地獄を去ゝる拾仏七枚打
冥札ゝの俳半ゝ
地獄を去ゝる二枚打俳ゝ宮刹

一軸

[illegible]田金吾あるのさ海と
[illegible]
[illegible]の屏風と拙れ掛物
世を逃さ海の内義先と
[illegible]一軸と屏風と拙乃掛物と
[illegible]さ海はと云書
おと[illegible]と男と[illegible]の[illegible]
[illegible]と友加つる魚も卯の時

一軸

見恵

月の友みと拙友義乃友
れ[illegible]と藤礼と移る
[illegible]の一軸と月拙友義乃友と[illegible]
ゆ[illegible]藤礼の体と見事[illegible]
[illegible]れて義の事[illegible]
[illegible]て彫[illegible]と[illegible]
[illegible]めあり拙首[illegible]
[illegible]の用と[illegible]と[illegible]

上巻終り

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

下巻
消表紙

墨谷堂製

文引集

歌仙

夢太

蕚北九ツ結てたゝ川青葉風

苔舍

袖ふるる梟へ小徒の哀而て　仝

枝ゝ茶屋乃佐ゝ中はし　太

横ゝ月淋芦乃長堤　仝

風ゝ海文秋の多ゝ見　鏡

ウ

相宿のかゝる法さい角力取　太
正直に琵琶の袋を物〳〵　鏡
食兼ぬまを面白く夏まつけ　太
安常乃櫛笥なつかしき　鏡
色つゝ花菖蒲を古い色ふるう　太
新乃車〳〵変はく　鏡
湯色に月も沢に温泉場臭　太
うけあいに鹿尾丁　鏡

廣海の高砂　太
去乃作　のと変紋付まる　鏡
寺〳〵の花に一町かゝれ里　太
なるふゝの色の丈もふゞ日　鏡
ウ
幸食比芋蔓もさめ尺山帰来　仝
夏〳〵合を掘ちゝすし　太
藤子を八月の比笠尾の唐黄　鏡
温純の子まさゝとこそ　太

近辺を彼方此方歩行する　鏡
師走も既に暮うすむ時　太
紙園の買ふて垂れ下る　鏡
留守番ふたり番茶一すん　太
六部を市と喧嘩の掛合し　鏡
馬子小唄乃淋しかりけり　太
い詰く此月を見て歩行　鏡
出帰宅朝の寒乃山わらく　太

十ウ

あく雲の芳地を旁よりかな　鏡
賽乃（サイノ）猩々脊うしはく　太
そこふあれを此を枕よれあれ　仝
楠と曲突と共へ寒うつも　鏡
ゆく水のみをりうしを花筏　仝
裾を引て山吹　乾葉

春之部

春日琴を閲て

風蕩る琴の響あり山の梅　柳肘

青侍は紅乃志とりや梅の花　吏仙

蝶〳〵や女の形〳〵　這軍

羽織る風八合の夕千鳥　雪圃

裏へ越せ藪入もあり蓬莱　惟章

菜の花の玉川見とり蝶　旅人

陰ふかの満干や細まり　芝一

泥棒する物て侍する時　鯉雷

大きなみなすの雲雀の　桃之

馬下る蝶すの　松葉

菜畑を通る蝶　芝蘭

春雨の音や物のまる　如月

春雨の音や二月　望丸

梅時や吹風河原の　春長

梅香や行かとの　蘇丈

三日月の人の初音を聞ばやと
思ひ寄て迷ふ山路の月
まつけを霞のうすく柳かな　敬雨
都なる白魚吹て狂ひ
哥孫の高の徑やものび　仲曙
一柄抜捨て山の播の哀　南苑
高くも幹の氏神の
風の又うつ家ものかの
ものの哀　吐月　風舟

宋屋　宏字
三日月の細みの船の月祭　梦石
さらさらの風の吹うつ雲雅の　桃僊
みちのくの春の山うつ　駿河　燕波
里の松の田毎の畦の　蔵春字
仏の寿て新たに柳の　呂風
高く梅の雲さく　宋屋　文素
沙の中の海の明の梅の　可住

出羽水戸と云う所にて 5 勝富
くもりはてしそらのまま 居迄
常夏に咲くらんも温泉保 義八尾
塩竈の浦の海士の刈藻 紀美
老の目も春を待ちぬ 出羽 風州
あるがまま雪の友や山ざくら 蘭窓
一思事にあちらこちら性なる 越州 有隣
拔とすれば神ぞ寒き 伊勢 春浪

若草や春を待ちぬ庵の角 温泉
伽羅の香を御士の柴大の鍋の如き
すすき伏人今ぞ春の日 何秀
いろいろの生を求る柳哉 二日
切ぬきに根をかくす雪の蕨 聲
石屋のうしろ山吹の花 東 山吹
人形の手に持たる桃の 桃鏡

歌仙

芋の月水と雲のあてはまるより　松餐
舟屋うすく　永三味線　吐月
米まし　九一書陰の雨風音　芭蕉
さあ出ぬ　たぐるかとあり　這平
きのふ　陽　撥布
名菜屋　前の禁の元　杉貢

芝居の合を揉手の鍋の茶　萬古
もう西掛　もも狸うり　五全
如月弾　文関の朝茶　風幷
ちらり陰　のりまきれ　鏡
ぼうぐる　焙茶の道具　月
掛ものと　長ん点のう　七
土手の如　都事九郎京茶　貢
穂の芋を　金所の撥　敏　七

全　石　平　月　饒　古　不　平

陽炎に立つ日の影の弛きかな　古

陽炎に立つ日の影の弛きかな　貞

すゝきを刈り残したる秋の暮　神

怖ゝ撓倫る所なし　全

囲炉裏に寄りて寒さを忘れけり　丹

白い雲雪の如く浮帯　饒

有明の花を惜しみ四十雀　神

鶏鳴に対す　古

[illegible]

石
全
夜
平
月
舟

変に

変之部

[illegible]

完了

蓮れ
物雲
信夫
義林
蜻蛉
寒夢
明蛾

野辺の草の
露ばかり
ぬれぬ日もなし
ひとこと
思風
ぬれぬ人も
なしとは
なるまでに
若草の
山水
初あらを
空なる
雲の
伸生
馬雲
稲妻
すさまじ
荒て
荒野
荒雨
後の人
を
花光
性光
を
脚
一節
を
出
花
草
千金
一
黄
現象
寸長

仲一さの堤ふる雨かんとす　鼠吟

見てゆかん雨ふる前の菖蒲　桃隈

ふるものや男の山を月ひとり　信夫東連

つゝきめを見てわかれ惜しき　渡柳

故郷に人利かんとせしかな　芭蕉

山さかり川ぶち　鶴鏡

無色無臭の色香つゝ　市風

新しき海の月　羽人

陰の入佐ふる雨の花　眉山

夕立北里ふりすてゝ　堂吹

下陸もさりすり川あり　若桂

女まち待ぬ　山奴

野き川　自ら隠みて流ふ　鐘山

一日の退屈　金鬼

貴少年　麻竹

世ふる世の楽さる都　茶来

世ふる世の楽　如井

出千子拾ひものあり野の瓜　女　雪葉
清さんまの月のまるく　雪支
松のもとかたてすまし清見潟　波光
葉さらさら吉野の里の笛の音　甲州　鉄色
さらさらつくしを呼ぶ花　陸奥　等雄
刈とまり帰や祝の陸ろこう　京　之下
柳の蔭から蔵の音のみ　花仏
時々ゆるしてあるを下り法　岩月

雪てあるをつとる朝ぞ寒け　鳴海　鈴夏
むら雪を代りて瓜の花　鳴海　鈴雄
月の夜に旨を喜ぶ　尾張　木兒
喜ぶその花の弦あり　桃仙

歌仙

もの〳〵を客とする主と白雲と　夢左
新しき花を南山の月　秋鏡
喜びの雑の一二を踊ぶ　風斉
かゝるとも物ふるとも　嵐蘭
家柄のもちし家名無論　曲月
世を言ふても夢の川々　左

ウ

表仮の法隆の座の牡丹　嵐蘭
拾ひもつまず居合勝　斉
百合も命谷の百合　曙
既勝は僧　生死無いちり　月
筆を角るあるのあるの　左
ゆゆしき歌も呼もある　鏡
もれもこそ一団相の巻の月　斉
碧の高の命かな　曙

[illegible]

十朝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

年の豆腐も霜の一葉哉　舟

[illegible]　月　渡

[illegible]　月　古

[illegible]　鏡

[illegible]　渡

[illegible]　舟

[illegible]　傍

十六

清水けんとむ箱根のお茶屋　大
ものとの早い世せの夕雲　川
朝日をつまみなみ砂丘を　晴
百里ろ今も矢立一本　斉
ちろ花の如光の花を修川　右
ゆろ翁あるる物の柏堂　鏡

炉ふる部

古ふる風ふ高　て世五ふ高　千之
尺立せは物部氏部氏部氏　東原
物ものつ　つふふまり整合　め雪
海原の中　中ふ五千年冬川　宮甲
物ものを　黄昏み明き屯の夢　友路
無所所　ら昭ふ月　白翅
鳥羽の文字　字てきふ氏ふ月　水鏡

十七

江戸中屋敷にて
百里のと人あり
ひとりもの
ちゝ梅の蕾
ちゝ山の雲間より
蘭の夢
おもひ
蘭のうちに

機石
花明
瞰亟
雨磧
史軻
梅渓
柏子
桃ら

心象のあの如いまもてかしこ
帰るとき世上の事
中道も芝の
うゝ折の
御行の帝
天川の月
彼方の除り
石月や何

金車
燕角
笹夕
雪川
花傘
愚ん
橋青
馬酔

宿かりて春雨の夜の秋　夢さめ
終宵聞て通るまくらかし
面影を問ふ松風の桃園
夏の夜の月に仙衣
青々葉の雲を動して
謝の簾外に生事あり　暁の殘馬
ゆく秋の京のあいさつ　大蛾
切風の夢の花すゝき　塘代

青い葉の雲うら葉ぐらい　瓦子
夕夏の香と春の蘭の花　豊酒
春と切れよりの小形の角力　白彩
葉のうれるまゝの香ある蘭も　くに
七月の木の豆腐の生まれ　子来
高の前の孫形さし　呼　素園
元を立て言を月の如四ら　蘆也有
玉葉の花すゝきます　桃鏡

歌仙

柳さく裏たもとてゆり御時宮　飛鏡

土橋うちなれそのの夕照　夢太

布陳の四角形を載きて　吐月

まくら所は弾丸わきて　鏡

第の見物客の見の月　左

野辺の風の巡るつれ立　月

げに
実に

芭蕉の秋を湯と寝の文り　鏡

月は名残を惜しむ名残を　左

鹿ひとりなくなると　月

風のおどろも実に極之　鏡

紫陽花の仏黄昏の月と朝の乱　左

さあと駕籠舁て笠をすると　月

宴も尾を見せしと財産　鏡

りも英花の見る浮世　左

七年のむかしなれど雨もよ
月
遠方遠におわすらむ
境
花もやし新の紙の新しき
月
与古文　末の巻てんぐ
境
十月
紫てる　桜色いろの稲袋
太
家慈車の妻をみさん
月
方丈の記　巻末にてかきつけ
境
世を流とまぐ思ふこのも
天

立春日　女を現ぜる
月
大鉢の四季　花の金屏
境
かすむ日　花も唐帽の雲
七
笈を深　第ようす歩もし
月
怖い事　百嘴でも宣子れを
境
痘瘡　痘瘡とのく相ようし
七
待夏の十五拍子とぞ深さも
月
胡瓜の拍　拍をうけて見遠
七

淡林の法師新たに造られて中をすれば
暗窟なり　　左
四位の時分まつれる鶯　　月
裸て起て見れば見る　　橋
紅葉を散かす朝のひさら　　左
世界の強きなり　　月

冬之部

等閑なる地のめぐる地の気
見るは春を待て方かく焼く窯の扇　　金沙
荒屋の茅蜩　　蕙地
蜩なき　　年來
荒屋から出て　　鬼宇
焚物を薪にもとの雲　　卯雲
水なし　　萬古

風花や都の川の投頭巾　三楚
一ゆすり折れて流るゝ水楼　芳樹
油気のぬけても青き指柳　翠羽
水仙や見ても我がよき女哉　五全
霧のりの鼻へ見えけり雁の宿　法枝
草足の花暖かくも柳哉　故造
めぐり神も出て力哉　湛堂
椎の花一つ時鳥　箕村

星一つ見えて月出る桐火桶　止啓
池ひとつまれて音もなく落つる　調右
細波や分別もなき落葉哉　蕗左
静かさのさかりしらぬ　伯兆
佛名や白きを見れば人の息　心滋
都までも廉の家で鞍掛けて　渡道
ゆふべまで雪見の人の　白牛
吹よりの梅よき花　秋底

氷るかと動くといふ　桃隣

蔭の蓮　四屋　出　吾仲

摺小あるは　下　眠江

蓮沼をあるは　唯我

あらくしの吹すめるは　麦雨

鶏の蓮の花　荊　来扇

蓮石も焼かるる冬　蕉　蚊分

蓮の川合歓　花上

水の北嶋　保一　汐もり　砂川

麦苗の空やかすかに　山紫

蓮つるる朝日夕日や冬の秋　駿河　乙兒

氷ながら流るる月夜　千婦

忘入て降る山の初しぐれ　晴山

ありしと蓮の咲ぶりと生涯　百朶

留守の人を尋て蓮見ふる　蓼雨

雪参や蓮の氷とる生て　都雁

出ぬえ乃思あ東へ戻る者乃ゝ　斯山
ホらゝしや町を鄙と枯て　大耳
三川嘉や川辺の橋を音信め　鳴海　和菊
初雪ぬまろう橋乃海　能登　烏明
又十年人ゝまれて帝京ゝ　尾張　南空
海　波紀の氷ゝ浮る師走哉　蓼太
髪おしむ兒ひとり有年九月　桃鏡

江戸日本橋通二丁目
戸倉屋喜兵衛板

此目録は續友引集に比したり

雪門俳書目録

芭蕉翁句解　蓼太述　晩花遺稿　吏流
以下一丁折ハシ
魚と水　蹴鞠の脚
二丁折ハシ
お四方の春（非水の音）　蓼太八百屋
二丁ウラ
ゆすみ田乃
以下手刻板黒地
下半面未刻板
黒地

水戸藩御用